

平成27年5月31日

堂島リバービエンナーレ2015 “Take Me To The River”同時代性の潮流

堂島リバーフォーラムではこの夏4度目となる「堂島リバービエンナーレ2015」を開催致します。アートをさまざまな分野とつなげることで、新たなアート、そして社会の地平を浮かび上げていきます。

今回は、英国よりTom Trevor (トム・トレバー)をアーティストックディレクターに迎え「Take Me To The River 一同時代性の潮流」と題した展示を行います。

Take Me To The Riverは、現代における「流れの空間性」と、そこに現れる変容と交換を探る展覧会です。国内外から注目のアーティストが大阪に集結。パリを拠点とする池田亮司は昨年11月『Red Bull Music Academy presents test pattern [n°6] : Ryoji Ikeda』でも大きく話題となりました。そんな池田は約22x11mの関西での展示としては最大のインスタレーションを展開します。また、現在開催中のヴェネチア・ビエンナーレのドイツ館の代表作家であるヒト・スタヤルも参加します。15組のアーティストがいずれも刺激的な話題作をダイナミックに展開いたします。

堂島リバービエンナーレは第一回目では、南條史生氏(森美術館館長)をアート・ディレクターに迎え「リフレクション:アートに見る世界の今」という展示を行いました。グローバル社会の中で、金融危機や地域紛争、貧困問題など、社会の諸相を提起する、世界各国からのアート作品が並び注目を集めました。

第二回目では、飯田高誉氏(森美術館理事/インディペンデントキュレーター)をアーティストック・ディレクターに迎え「ECOSOPHIA(エコソフィア)」と題した展示を行います。これからの地球のあり方を、アートと建築というテーマのもとに自然環境、社会環境、人間の心理の3方向から考察する場となり未来に向けての地球ヴィジョン、新たな自然観、世界観を指し示す空間を会場全体で表現しました。

第三回目では、台北をベースに現代アートコレクターとして活躍しているルディ・ツェン氏をアーティストックディレクターに招き、タイトルを「Little Water」として開催しました。川が人々の日常の暮らしに大きな役割を果たしている姿、流れる川の美しさや水の多様性からインスピレーションを得て「豊かな文明・文化は川沿いから始まる」をテーマにしました。

過去の3回とは異なる視点からのアプローチのキュレーションで作上げられた本展を、ぜひとも貴媒体にてお取り挙げいただき、ご取材いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

堂島リバーフォーラム
プロデューサー 古久保 ひかり

“Take Me To The River”コンセプト

鴨長明が書いた「方丈記」(1212年)の出だしの一節「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」は、日本文学における“無常”の表現として大変良く知られています。一方、これと驚くほど似た表現が西洋にもあるのをご存知でしょうか。ギリシャ哲学者のヘラクレイトスは、紀元前500年頃、「同じ川の流れの中には再び入ることはできない」と述べ、「万物は流転する」という有名な言葉を残しました。また現代では、社会学者マニユエル・カステルが、その著書「ネットワーク社会の出現」(The Rise of Network Society, 1996)の中で、急速に技術革新を続ける情報化時代の「流れの空間性」という問題を指摘しています。グローバル化した流動性により、人と社会と関わりにおいて固定された場所よりも、“時間の流れ”がますます重要となってきました。

テイク・ミー・トゥー・ザ・リバーは、現代における「流れの空間性」と、そこに現れる変容と交換を探る展覧会です。今日の世界は、歴史上、前例のない多様性によって特徴づけられています。本展では、そうしたグローバルに錯綜した様相を、今日の現代美術を通して検証すべく、「川」という比喻を用います。従来の共同体的な場に依拠したセルフ(自我)の概念は失われ、それに代わり、より流動的な「ネットワーク・カルチャー」という場に依拠したセルフが現れているのです。果たして、個々のアーティストの主観的なあり様が、こうした新たな状況においていかに機能し、また変化をもたらさうのか。この展覧会はそうした物の見方を喚起します。

タイトルの“Take Me To The River”は、ソウル歌手、アル・グリーンとギタリスト、メイボン・ティニー・ホッジスによって1973年に書かれたR&Bの名曲にちなんでいます。その歌詞は、ロマンスへの憧れと神への祈りが混ざったもので、その相互が交錯することはありません。それはまさに、常に流転し続けながら刻々と変化し続ける川の流れ、流動するものの本質を象徴的にするものでもあるのです。

アーティストック・ディレクター トム・トレバー

開催概要

展覧会名 : 堂島リバービエンナーレ2015

テーマ : "Take Me To The River" 同時代性の潮流

会場 : 堂島リバーフォーラム(大阪市福島区福島1-1-17)

会期 : 7月25日(土)~8月30日(日) 会期中無休

開館時間 : 11:00-19:00(入館18:30まで)

入場料 : 一般1,000円、高校・大学生 700円、小学・中学生500円

主催 : 堂島リバーフォーラム

企画制作 : 堂島リバーフォーラム

特別協賛 : 大和ハウス工業株式会社

協賛 : サントリーホールディングス株式会社/株式会社ECC/NTT西日本/コクヨ株式会社
株式会社ヤマノアンド アソシエイツ/アートコーポレーション株式会社

後援 : 大阪府/大阪市/大阪商工会議所/一般社団法人 関西経済同友会、
公益財団法人 関西 大阪21世紀協会/グレートブリテン・ササカワ財団/在京都フランス総領事館
アンスティチュ・フランセ関西/朝日放送株式会社/ FM802 / FM COCOLO

協力 : 株式会社ナイルスコミュニケーションズ/京阪電気鉄道株式会社/TOKK/一本松海運株式会社
株式会社ハートス

参加アーティスト : アンガス・フェアハースト/ピーター・フェンド/サイモン・フジワラ/メラニー・ギリガン/池田亮司
メラニー・ジャクソン/笹本晃/島袋道浩/下道基行/マイケル・スティープンソン
ヒト・スタヤル/スーパーフレックス/照屋勇賢/プレイ/フェルメール&エイルマンズ

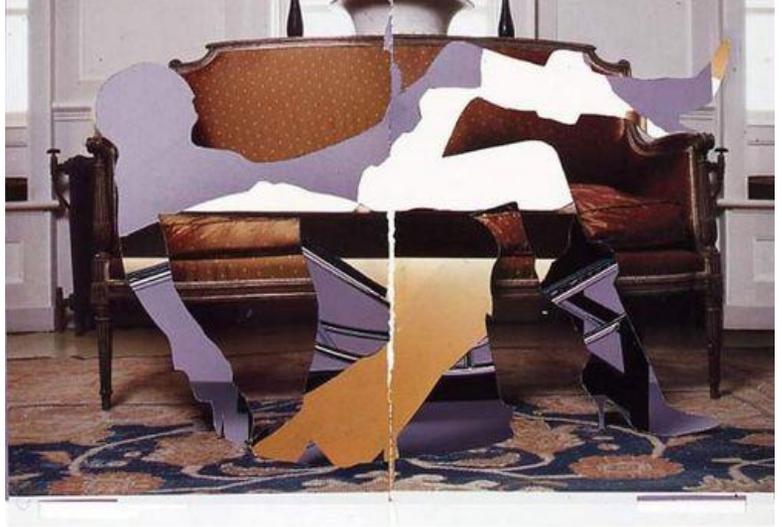
アーティストック・ディレクター : Tom Trevor (トム・トレバー)

参加アーティスト、代表作

アンガス・フェアハースト (1966年イギリス・ケント生まれ、2008年没)

英国の作家アンガス・フェアハーストは、いわゆる90年代に登場し、その後、世界の現代美術界に多大な影響を与え続けるいわゆるYBA (Young British Artists) の一人である。

作品のジャンルは、彫刻、絵画、パフォーマンスと多岐にわたり、自意識や欲望、広告、大量生産、大量消費といったテーマを扱う作品が多い。特に、ファッション雑誌のモデルの姿を切り抜いてコラージュ風にアレンジした作品は有名で、モデルの不在を通してそれを焦点とする見る者の欲望や自意識を浮かびあがらせる。



ピーター・フェンド (1950年米国生まれ、ニューヨーク在住)

ピーター・フェンドは、ジェニー・ホルツァーやリチャード・プリンスなどがニューヨークに設立した"OFFICES"と呼ばれる組織体を発展させた一種の会社組織「オーシャン・アート」の設立者として知られる。この組織は地球規模の環境問題をテーマにした作品を手掛け、世界中で発表している。

フェンド自身が手掛ける作品としては、海を中心に据えて世界を再構築した地図のような平面作品が特に有名である。陸地と海面を入れ替えるという逆の視点で世界を眺めることにより、人間中心の世界観が大きく揺らぎ、エコロジーに向けた新しい意識が立ち上がってくる。堂島リバービエンナーレの展示もこのタイプの作品を予定している。



参加アーティスト、代表作

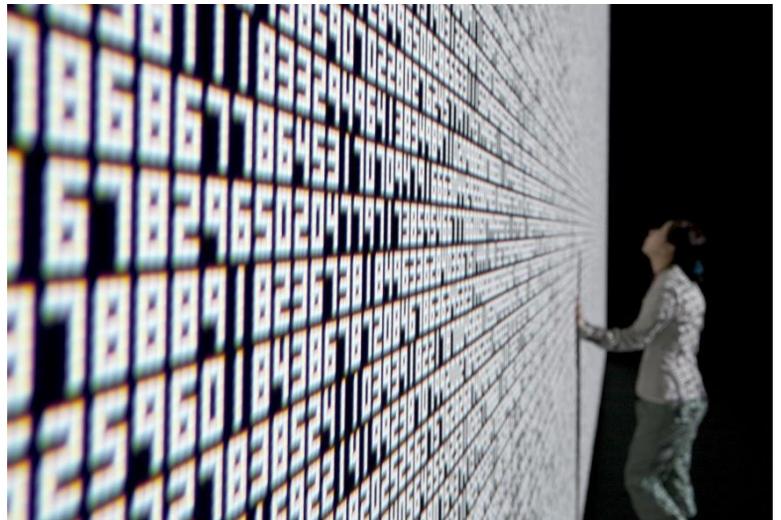
サイモン・フジワラ(1982年ロンドン生まれ，ベルリン在住)

サイモン・フジワラは日本人の父と英国人の母の間に生まれ、幼くして両親が離婚し、英国の母のもとで育てられた。彼は、自身の人生のバックグラウンドを素材として、そこに事実とフィクションを絶妙な配合で交錯させながら作品化する。堂島リバービエンナーレでは、彼が若いころに別れた父との再会をテーマに、陶芸家である父とともに浜田庄司やバーナードリーチの作品の再制作に取り組むというもの。ビデオと立体作品から構成されるこの作品において、国籍の違う親と子が離れて暮らしてきた時間の重みを描くために、ユーモアをちりばめた衝撃的な結末が用意されている。



池田亮司 (1966年 岐阜生まれ，パリ在住)

池田亮司は、電子的な音源やデータそのものを作品化し、それらをビデオプロジェクションとリンクさせた壮大なインスタレーションとして構成する。彼は、人間の耳がかろうじて聞こえる周波数を使うなどして、音楽の「生の状態」を浮かび上がらせる。ノイズやパルスといった要素を駆使した一種の「音による造形作品」は、その高い創造性において国際的に高く評価されている。



参加アーティスト、代表作

メラニー・ジャクソン(1968年ハリウッド生まれ、ロンドン在住)

メラニー・ジャクソンの作品は、作家自身の存在が作品の主題を形作る要素の中から浮かび上がってくるという、独特の作風を持つ。彼女にとって展示は実験の場であり、記録、音楽、ビデオ、パフォーマンスなどあらゆる手法を用いてアートにまつわる様々な問題を浮かび上がらせる。出品作品は、座礁した大型コンテナ船をモチーフにした紙で出来たジオラマ的なインスタレーションを予定。この作品が会場におかれることにより生じる様々な状況—作家の意図、展示の見え方、作品の構成が示す意味—それらがすべて見るものに投げかけられた疑問となる。



下道基行 (1978年岡山生まれ、名古屋在住)

下道基行の作品の素材は旅である。自らが移動し、未知なる世界へと介入していくことで発生し、また発見される事物や価値が作品として転化される。鳥居シリーズでは、第二次世界大戦中に日本の植民地に建てられた現存する鳥居を巡り写真に収める旅であり、橋のシリーズでは、2つの領域をつなぐものとして橋をとらえ、そうした観点で生じる「橋」の姿を写真に収めていく旅である。



参加アーティスト、代表作

プレイ (アーティストグループ 1967年関西で結成、現在も活動中)

屋外を舞台に「特になんらかの理由を持たない行為」を行うことを目的としたアーティスト・グループ。1967年に様々な背景を持つアーティストが集まって関西で結成。60年代から現在に至るまでグループとして活動を続けている極めて稀有な存在として、戦後の日本現代美術史に名を残している。「野外での永遠の時間と行為」を志向すると述べる彼らは、自らの行為を、プレイ(あそび)であること、誠実であること、ユーモアがあることに意識を置いて活動続ける。彼らの最も有名なパフォーマンスとして、淀川を矢印の形状をした筏にのって下るものがある。矢印の形状が示す志向性と、その行為の無目的性が、激しくせめぎ合うこの作品は、近年パリのセヌ川でも行われて話題となった。



笹本晃 (1980年横浜生まれ、ニューヨーク在住)

ニューヨークをベースに活動する日本人アーティスト。パフォーマンス、彫刻、ダンスなど、自らの芸術的な目的を追求する上でもっとも有効な手段を柔軟に採用し、作品として表現する。また様々なジャンルのアーティストたちとのコラボレーションも多く行う。堂島リバービエンナーレでは、内部に鍵が閉じ込められた氷の塊を多数吊るし、そこから溶け出した水が下に置かれた金属のボールにあたって生じる音をアンプで増幅する作品を展示する。



参加アーティスト、代表作

島袋道浩（1969神戸生まれ、ベルリン在住）

あるテーマ性を持って世界を旅し、そのテーマをきっかけとして生まれた出会いや経験を作品化するアーティスト。片方の眉毛をそった状態でヨーロッパの11か国をめぐる旅に出た「作品」では、その奇妙な表情を持つ日本の青年に対して寄せられた人々の好奇心や友情を、写真、ビデオ、ドローイングなどで構成されたインスタレーションを通して見るものに伝える。



照屋勇賢（1973年沖縄県生まれ、ニューヨーク在住）

照屋勇賢は、日常的にありふれたものを素材に、それらに手を加え、その様相を変容させることで現代社会の様々な問題をあぶりだす。着物、宅配ピザの箱、新聞記事などが、超絶的な技法によって別の意味を帯びた存在に転化される。堂島リバーフォーラムでは、マクドナルドの紙袋の表面を樹木の形状に切り抜き、袋の内側に一幅の自然の風景を表現した作品を展示する。



参加アーティスト、代表作

フェルメール&エイルマンス (1973年 1962年ベルギー生まれ、ブリュッセル在住)

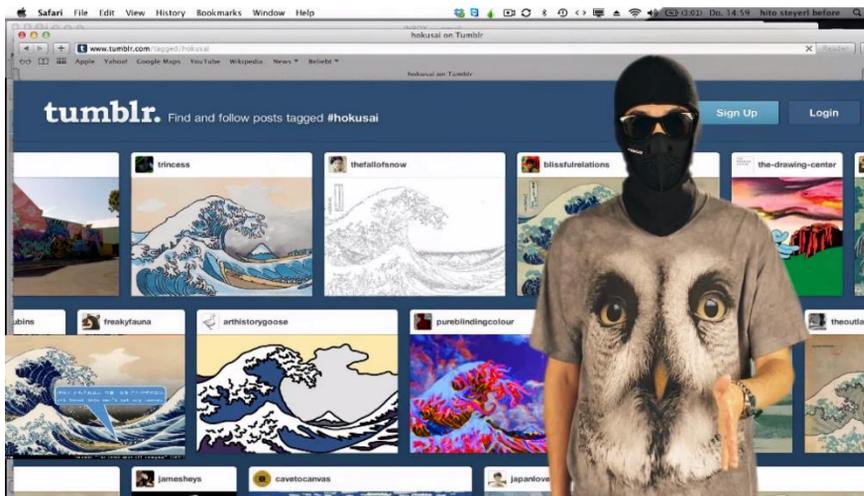
2006年から活動するベルギー出身の二人組のアーティストユニット。アート、建築、経済活動の3者間を結ぶ関係性のダイナミズムに焦点を当てた作品を手掛ける。彼らは自らが住むブリュッセルのアパートそのものを作品として位置づけ、自分たちのプライバシーを保持しつつ、その中を外部から覗き込む視点を、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションといった手法で提供する。最近手掛けているART HOUSE INDEX (AHI-) は、作品としての住まいを経済原理に取り込む新たな方法である。アートの原理は、経済と同様、信用を基盤とした一つの制度であり、マーケットはその信用が実践として機能する場である。堂島リバービエンナーレでは、こうした問題意識にもとづいた新作の映像作品MASQUERADEを出品予定である。この作品は、高度に成長したマネー経済とグローバル化しアートマーケットをモチーフとしたもので、この作品と平行して、インテリア雑誌の体裁をとった経済とアートの価値について考察する出版物も作品として展示する予定である。



参加アーティスト、代表作

ヒト・スタヤル (1966年ミュンヘン生まれ、ベルリン在住)

ヒト・スタヤルは、映像、美術、ドキュメンタリー映像を手掛けるドイツ人の作家。デジタル時代における、映像が持つ現代的意味や政治性といった要素を、ユニークな手法で際立たせる。グローバルなコミュニケーション・テクノロジー、— およびそれに付随する画像流通を介して浮かび上がるグローバルな関係性 — が政治、文化、自意識などにもたらす多大な影響力といった問題が、作品の核心となっている。第56回ヴェネチアビエンナーレ(2015年)・ドイツ館代表アーティスト。



参加アーティスト、代表作

メラニー・ギリガン (1979年 トロント生まれ、ニューヨークおよびロンドン在住)

メラニー・ギリガンの映像作品は、テクノロジーや経済が、いかにして日常の相互作用や人間関係を手段化していくかを描く。最新作の実験的なナレーション・ドラマ「常識」では、他人の感覚や感情を直接体験することができる空想上の未来テクノロジーである、「パッチ」と呼ばれる一種の人工器官について語られる。ギリガンは、現代における私たちとテクノロジー（携帯電話、iPadなど）との関係性を取り上げ、それらが私たちの意識、身体、そして資本主義経済において生きること、関係性を持つことに多大な影響を及ぼしていることについて問題を提起する。



マイケル・スティーブンソン (1964年ニュージーランド生まれ、ベルリン在住)

マイケル・スティーブンソンの作品は、コンセプトと物質性の双方に関わる。その作品は、立体、インスタレーション、ドローイング、映像など多岐にわたり、彼は、個々の作品が意図するコンセプトをベースに作品形態を形成しつつ、アートと経済との結節点となる歴史的な事象について、特に大きな関心を寄せる。作品の出発点として、公的、私的を問わず、複雑に交錯する特定の歴史上の人物や事件が取り上げられ、それらは考古学に似せた手法によって提示される。作品には、物語の核心となる物体の再制作物やコピーが含まれることも多々ある。それらの物語は寓意性を持ち、スティーブンスンの作品を介して、特異性から普遍性へ、あるいは不可能性からファンタジーへとといった幅広い読解を結果的にもたらすものとなる。彼の興味はまさにそうした点にある。



参加アーティスト、代表作

スーパーフレックス(1993年に結成、コペンハーゲンで活動)

スーパーフレックスは、1993年にヤコブ・フェンガー、ラスムス・ニールセン、ビョーンスターネ・クリスチャンセンによってコペンハーゲンで結成されたアーティストのグループである。彼らは自分たちの作成制作をツール（道具）と呼び、経済生産性を変容させる実験的モデル開発などの議論に人々を招き入れる装置として位置付けている。経済パワー、民主的生産性のための条件、自律的な組織化といったものが、彼らの作品のテーマとなる。実際彼らは、ブラジル、タイ、ヨーロッパにおいて、代替エネルギー生産や商品生産の方式について研究を行い、現状の経済システムの問題点を明らかにした。これらの作品は、一 例えば、ガラナ飲料に関わる現在進行中のプロジェクト「ガラナ・プロジェクト」において、地元の生産者と共にカフェイン含有量が高い実をつける作物を使った飲料を開発するなど、必ずしも商業主義やグローバリズムに反対するものではなく、むしろ経済システムを視覚化し、新しいバランスを確立させるものである。

